

## 「バプテスマのヨハネの教え」

ルカの福音書 3:7～15

### はじめに

聖書を理解する、解釈するとはつまり聖書の記述、その御言葉と別の何かを結び付けることを指します。多くの場合、それは自分自身であったり、自分や人の言動や行動、または今の自分の置かれている状況や環境であったりします。よく教会ではそれを御言葉の適用と言って自分の生き方や考え方の基準、指標とするように勧めます。それによって人生における様々な問題が解決したり、それを乗り越えることができたりするからです。長い間教会は、人は聖書をそのような道具として用いてきました。しかしそれだけでは神の御業が、神そのものの存在が自分自身という非常に小さな枠、狭い視野にはめ込まれ、そのためにその大部分を削られ、省かれ、本来の神の遠大かつ壮大なご計画が全く見えなくなってしまいます。その危機的状態から脱するためには、聖書を聖書で説く、その御言葉を、そこに記された出来事を、聖書の他の記述と結び付けて読み解く必要があります。そうすることによって聖書はその小さな檻のような枠組みから解き放たれて、その本来のメッセージを私たちに伝えてくれます。今日もそのような取り組みで読み解いてまいりますが、今日は主に聖書の最後の書、ヨハネの黙示録と多く結び付けて読み解いてまいります。なぜなら聖書は、神は初めから常に終わりを見定めて、そのご計画の最後、完成、完了を指し示して進んでおられるからです。それではご一緒に進んでまいりましょう。聖霊の助けがありますように。

### 1. 迫りくる怒り

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:7 ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしの子孫たち。だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。」

前回も述べたように、ザカリヤの子ヨハネ、通称バプテスマのヨハネがヨルダンで説いたそのバプテスマとは、ヘブル語ではターヴァル(טַבַּל)と言い、それは本来、血に浸した、血に染まった服、長子の着る長服を指し示し(創世記 37:31)、これをその身にまとわれ、やがて地上に再臨されるメシア、神の子羊、御子イエシュアを指し示すものです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かだ真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい怒りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

19:16 その衣と、もものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

このように「血に染まった衣」をまとい、天から現れる、再臨される「王の王、主の主」イエシュアのその形相は「目は燃える炎のよう」「口からは…鋭い剣」とあるように、非常に恐ろしいものであり、「さばき」と「戦いをされる」ために来られる、ともあり、それはすなわち「全能者なる神の激しい憤り」によるものであると預言されています。バプテスマのヨハネもまたここで神の「迫り来る怒り」について述べていますが、これは究極的には上記の預言のそれと同義であり、その「全能者なる神の激しい憤り」、すなわち再臨のイエシュアによる「迫り来る怒り」によって打たれる「まむしの子孫たち」とはつまり神に敵対する「諸国の民」を指しており、彼らに対する神のさばきが必ず下ること、その御怒りから逃れるすべはないことが示されています。

## 2. 悔い改め

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。

この御言葉の訳を素直に読むならば、「迫り来る怒り」を受けないために「悔い改めにふさわしい実を結びなさい」、つまり救われるためには何か良いこと、正しいことをしなければならぬ、行わなければ救われない、と言っているように受け取れます。しかし人は自らの行い、生き方によっては決して救われません。イエシュアはかつて弟子たちにこう言われました。

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:24 「子たちよ、神の国に入ることは、なんと難しいことでしょう。

10:25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」

10:26 弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」

10:27 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです。」

このように、「迫り来る怒り」から逃れ、救われる、「神の国に入ること」とは、「人にはできないこと」つまり人の行いによるのではなく、「神にはどんなことでもできる」、神の御業であると述べておられます。では「悔い改め」とは何でしょう。どのようなことを指すのでしょうか。ヘブル語で見るとそれはシューヴ(שוב)であり、それは本来、大地に「帰る」、土のちりに「帰る」ことを意味しています。

創世記【新改訳 2017】

3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

最初の人アダムは「土のちり」からその身体、その肉体が造られました。シューヴとは人がそれ以前の状態、状況にもう一度帰る、戻るということであり、それはすなわち、もう一度身体が造り変えられる、全く新しい身体が与えられることであり、すなわち「悔い改め」とは考え方や生き方、行いを改める程度で成せるものではなく、人が全く新しく創造され直すこと、つまり「復活」することを意味する言葉なのです。これこそまさに人には絶対にできない、神にのみ可能な御業と言えるものです。このように「悔い改めにふさわしい実」とは身体のみがえり、「復活」のことです。ヨハネが言っている「神は…アブラハムの子らを起こすことができる」とは、神はイスラエルの復活、イスラエル王国の再興、再建を成し遂げられるというものであり、これこそまさに「悔い改めにふさわしい実を結」ばれる神の御業であることがここには指し示されているのです。そしてそれは同時にこの「アブラハムの子ら」イスラエルに敵対する「まむしの子孫たち」「諸国の民」が再臨のイエシュアによる「迫り来る怒り」「全能者なる神の激しい憤り」に打たれる、打ち滅ぼされることをも指しています。それが次の御言葉です。

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:9 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」

これは「神の国」の対極に位置する、罪人たちの行きつく先である「ゲヘナ」とも呼ばれる、硫黄の燃える「火の池」を指しており、まさにこう記されていることが起こります。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

20:12 また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。

20:13 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。

20:14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

20:15 いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

救いをもたらすのも神ならば、滅びもまた然りです。神の権威が、その裁きがいかに厳しく残酷で恐るべきものであるかがここには示されています。私たちはつい神の愛、その恵みやあわれみの側面ばかりを見てしまいがちですが、神はこのような厳しい側面もお持ちなのです。しかしそれは神の愛の激しさのゆえであることを覚えてください。神はその愛する者たちに敵対し、これを虐げ、苦しめた者たちを決して許してはおけない、生かしてはおけないのです。これらの者たちがもう二度と、永遠に愛する者たちに手出しができないように、近づかせないように、愛する者たちを守るためにこれらのことを行われるのです。

すべては神の愛のゆえ、神のご性質が愛であるがゆえあり、救いと滅びという対極の御業を成される神のこのご性質に一切の矛盾、一切の相克、不合理はないのです。

### 3. 待ち望んでいた人々

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:10 群衆はヨハネに尋ねた。「それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか。」

3:11 ヨハネは答えた。「下着を二枚持っている人は、持っていない人に分けてあげなさい。食べ物を持っている人も同じようにしなさい。」

3:12 取税人たちもバプテスマを受けにやって来て、ヨハネに言った。「先生、私たちはどうすればよいのでしょうか。」

3:13 ヨハネは彼らに言った。「決められた以上には、何も取り立ててはいけません。」

3:14 兵士たちもヨハネに尋ねた。「この私たちはどうすればよいのでしょうか。」ヨハネは言った。「だけれども、金を力づくで奪ったり脅し取ったりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」

3:15 人々はキリストを待ち望んでいたため、みなヨハネのことを、もしかするとこの方がキリストではないか、と心の中で考えていた。

先ほども述べましたが、人は自らの行いによって救われる「悔い改めにふさわしい実を結ぶ」ということとはありません。ですからここに記されているのは、決して救われるための方法、行為ではないことを覚えてください。最初に言うておきますがこれらはすべて「型」であり、神のご計画を指し示しているのです。ここに「群衆」「取税人」「兵士」という三つのタイプの人々が登場してヨハネに質問していますが、この人々はいずれもキリストすなわちメシアを「待ち望んでいた」と記されています。そのような人々に対してヨハネは答えているのです。つまりそれは、終わりの時代にあつてメシアであるイエシュアを待ち望む人々の三つの「型」がここには示されているのです。ではその一つひとつについて見てみましょう。

#### (1) 下着を二枚持っている人

「下着」と訳されていますが、ヘブル語ではクットーネット(קִטְוֹנֶת)という言葉が使われており、これは本来、エデンの園において罪を犯したアダムとその妻エバのために神が作り着せてくださった「皮の衣(創世記 3:21)」を指す言葉です。かく言うヨハネ自身もこれを身に着けていたことが記されています(マルコ 1:6)。またその装いは預言者エリヤとも類似しており(Ⅱ列王記 1:8)、つまりこの「下着を二枚持っている人」とは、二人の預言者を指し示しているのです。しかしそれはヨハネとエリヤではなく、究極的にはヨハネの黙示録に登場する名もなき「二人の証人」を指しています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」

11:4 彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

11:7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

11:8 彼らの死体は大きな都の大通りにさらされる。その都は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ、そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。

11:11 しかし、三日半の後、いのちの息が神から出て二人のうちに入り、彼らは自分たちの足で立った。見ていた者たちは大きな恐怖に襲われた。

11:12 二人は、天から大きな声が「ここに上れ」と言うのを聞いた。そして、彼らは雲に包まれて天に上った。彼らの敵たちはそれを見た。

11:13 そのとき、大きな地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死んだ。残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。

やがて終わりの日に現れるこの「二人の証人」は、獣と呼ばれる反キリストによって殺されますが、その復活と昇天すなわち「悔い改めにふさわしい美」によってイエシュアが「十字架にかけられた」「都」すなわちエルサレムにいたイスラエルの「残った者たち」を「ソドムやエジプト」と表される霊的に墮落した状態から神に従う者へと立ち返らせます。このように「二人の証人」は自分たちが持っていた霊、神への正しい信仰を、まるで下着や食べ物を分け与えるように与えたのです。その結果、このエルサレムの「残った者たち」は、獣に屈することなく神の働きを力強く行う者へと変えられます。それが次の「取税人」たちの「型」です。

## (2) 決められたことに従う取税人

「取税人」、かつての彼らは「決められた以上に」に取り立てる者たちでした。これは口伝律法によって神が命じた教え、戒め以上の、神が命じておられない規定をもってイスラエルの民を縛り、指導してきたパリサイ人、律法学者などのユダヤ人の霊的指導者たちを表した「型」です。しかしそんな彼らは先の「二人の証人」の復活と昇天を目の当たりにし、その墮落から立ち上がり、神に立ち返るのです。それはエルサレムの「残った者たち」、以下の預言では「神のしもべたち」、「額に印を…押された者たち」とも呼ばれ、その数は「十四万四千人」であると預言されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:3 「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけない。」

7:4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

14:1 また私は見た。すると見よ、子羊がシオンの山の上に立っていた。また、子羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には子羊の名と、子羊の父の名が記されていた。

14:4 この人たちは、女に触れて汚れたことがない者たちで、童貞である。彼らは、子羊が行く所、どこにでもついて行く。彼らは、神と子羊に献げられる初穂として、人々の中から贖い出されたのである。

14:5 彼らの口には偽りが見出されなかった。彼らは傷のない者たちである。

彼らはやがて神の子羊イエシュアとともに「シオンの山の上」エルサレムに立ち、その「口には偽りが見出され」ない、「傷のない者たち」とされます。それが「決められた以上には」何も取り立てない、「決められた」ことに全く聞き従う「取税人たち」に表されたイスラエルの残りの者たちの「型」です。

### (3) 自分の給料で満足する兵士

そして「兵士」たち、当時のイスラエルには多くのローマ兵が駐在していました。つまり彼らは異邦人です。このローマだけでなく、イスラエルの歴史において多くの異邦の国々、諸国の民が幾度もイスラエルの民、ユダヤ人を迫害し、虐げ、まさに「力づくで奪ったり脅し取ったりして」きました。しかしそんな彼らの中にも「キリストを待ち望んでいた」者たちがいた、起こされたということであり、これはもちろん私たちと同じく、異邦人でありながらイスラエルの神を信じ、メシアであるイエシュアを信じる者たちの「型」です。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

7:11 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物の周りに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を礼拝して言った。

7:12 「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、私たちの神に世々限りなくあるように。アーメン。」

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそぞ存じます」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

先に述べた「十四万四千人」の「神のしもべたち」、エルサレムの「残った者たち」に続いて、これらの「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆」もまた、終わりの日には起こされます。世の終わり、終わりの時代と聞くとどうしても災害、戦争などの悪い状況、悲しいニュースばかりが連想されますが、このように終わりの日には、非常に多くの異邦人たちが神に立ち返るといふ出来事もまた起こるのです。まさに「罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれる（ローマ 5:20）」ということです。そしてこれらの人々は「大きな患難を経て」その後神の子羊イエシュアの御前で賛美する者へと変えられます。ここに「その衣を洗い、子羊の血で白くした」とありますが、この記述もまた「血に浸す」という意味のターヴァル、すなわちバプテスマが指し示すものであると言えます。しかしこれらの人々と先の者たちとは異なる存在です。それが異邦人の兵士たちに対して「自分の給料で満足しなさい」という御言葉に示された、イスラエルを神の選びの民としてその価値、存在を認め、これを祝福し、異邦人である自分たちとの区別を受け入れる者たちを表しているのです。

### 4. どうすればよいのでしょうか

このように、聖書の御言葉を黙示録の預言、すなわち神のご計画の終わり、その完成を表す御言葉と結びつけていくなれば、ヨハネが語っていることが単なる慈善、善行、隣人愛を謳ったものではないことがわかります。そもそもそのような行いは、ここでわざわざ教えられなくてもそれが正しいことは、誰もが知っています。しかもそのような行いでは人は救われません。ただ神だけが、聖書の神、イスラエルの神、

神の御子イエシュアだけがそれを成し遂げることがおできになります。少し極端な言い方をしますが、聖書に記されているものはすべて神のご計画であり、そしてそのすべては神の御業、ただ神によって成されることなのです。そう聞いてもなおあなたは「**それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか。**」と尋ねられますか。いいですか、よく聞いてください。今日の箇所は、私は「**どうすればよいのでしょうか**」という、自分の行い、自分自身にばかり目を留めている、自己中心という罪に陥っている、捕らわれている人が、やがて神によって変えられる、復活して新しくきよくされるという内容になっているのです。あなたがすることよりも、神のなさることの方が重要であることを知ってください。私たちが目を留めるべきなのは、自分の行いではありません。神の御業、神のご計画であるべきなのです。その到来、その成就、その完成を見つめなければならないのです。この教会、この礼拝は、一週間の中で自分自身と世の中にどっぷりと埋没してしまった一人ひとりの思い、考え、視点を再び神のそれに軌道修正させる、思い起こさせ、立ち返らせる場所です。ですからまた来週も、その次の週も、毎週みなさん一人ひとりがこの時間にこの場所に来られること、帰って来られることを心からお待ちしています。しかし願わくば、いつも聖霊がともにあって、みなさんの神に対する心と思いを正しく保ち、守ってくださいますように。

祈りましょう。